



## トルコのシリア侵攻：「平和の泉」作戦

テンブル大学ジャパンキャンパス政治学科 上級准教授 柿崎 正樹

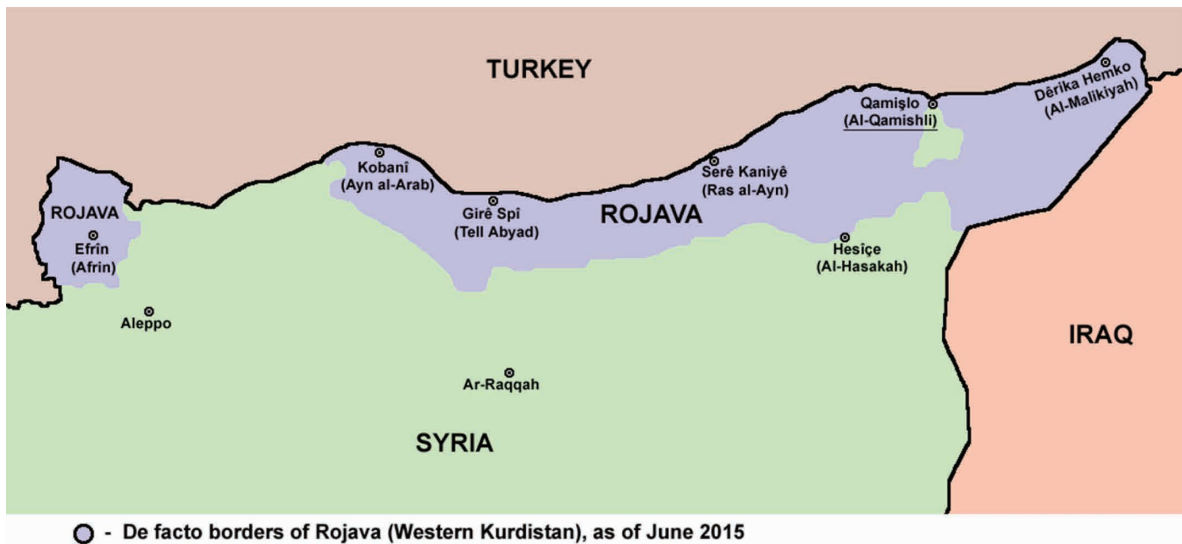
2019年10月9日、トルコはシリア北部からクルド人勢力の排除を目的とする3度目の越境軍事作戦を開始した。トルコにとって最大の安全保障上の脅威は、欧米諸国がそのせん滅を模索してきた「イスラム国」(IS)ではなく、非合法武装組織クルディスタン労働者党(PKK)の姉妹組織であるシリアのクルド民主統一党(PYD)およびその軍事部門の人民防衛部隊(YPG)である。本稿では、まずトルコによるシリアに対する3度目の軍事作戦にいたる経緯を振り返り、トルコ政府にとってのPYD/YPGの脅威を確認し、「平和の泉」作戦と作戦終了後のトルコが直面するふたつの問題について述べる。

### シリア北部で台頭するPYDとトルコの懸念

2011年に始まった反政府運動をきっかけにシリア各地で反アサド諸勢力が台頭し、シリア政府軍は多方面での対応を余儀なくされた。そこでシリア政府は2012年夏になると戦力の集中と選択を進め、シリア北部から部隊を引き上げ、アレッポ、ホムス、ダマスカスといったシリア西部主要都市の防衛に専念した。この結果、シリア北部から北東部でPYDは急速に支配領域を広げた。PYDはトルコに近いアフリン、コバニ、ジャジーラの北部3地区を実効支配し自治を開始したが、問題はこれらの地区が地理的につながっておらず、それぞれの間にはISの支配領域が入り込んでいたことであった。そこでPYDはISを撃退することでこれら3地区を接続し、シリア北部でのクルドの自治拡大を目指した。

2014年10月になると、クルド人が多く住むトルコ国境沿いの町コバニをISが包囲した。クルド勢力はトルコに支援を求めたが、PYDおよびYPGをPKK(トルコ、欧米、日本などではテロ組織指定)の関連組織とみなすトルコ政府は、コバニ支援が「PKK支援」になりかねないと懸念し動かず、結局ISを撃退したのはYPGとイラクのクルディスタン地域政府(KRG)が派遣したペシュメルガ部隊であった。この戦いで米軍は、トルコの強い反対を押し切ってYPGとの対IS軍事協力を本格化させた。コバニの戦いでクルド人勢力がISの拡大を地上戦で初めて抑え込んだこと、さらにはYPGの女性防衛部隊であるYPJが活躍したことなどが重なり国際的な注目を浴びたため、この頃からPYDの国際的な評価

図1 2015年6月のシリアにおけるPYD支配領域



(出所) [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rojava\\_june\\_2015.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rojava_june_2015.png)

(注) 紫がPYDの支配領域。2015年夏には北央と北東のロジャヴァが接続された。

が顕著に高まった<sup>1</sup>。また、強権的なアサド政権、過激派組織IS、権威主義化するトルコに囲まれる中、直接民主制、フェミニズム、エコロジーといったキーワードを巧みに用いてシリア北部の統治を正当化するPYDは、欧米での宣伝戦で大きな成功を収めた<sup>2</sup>。

2015年6月になるとPYDは、米軍の空爆支援を受けてISとの戦いを有利に進め、コバニの東に位置しISの補給拠点であったテルアビヤドを制圧し、コバニとジャジーラ両地区の接続に成功した(図1)。そして2016年3月、PYDは「北シリア民主連邦」樹立を宣言した。シリア北央のコバニと北東のジャジーラを結合させたPYDは、当然支配領域をさらに西に伸ばすことで北西のアフリンとの接続を目指した。

ISとの戦いにおいてPYDがシリア北部の実効支配を既成事実化する流れは、トルコにとっては見逃すことのできない状況であった。YPGおよびPYDがPKKとつながりがあることはトルコにとっては自明のことであった。そもそもトルコ政府と武装闘争を続けるPKKは、長年シリア国内で多数の戦闘員をリクルートし、彼らを軍事キャンプで訓練してきた。チグリス・ユーフラテス川の水資源をめぐりトルコと激しく対立していたシリア政府は、トルコに対するカードとして、国内でのPKKの活動を黙認した。しかしトルコ政府が1998年に開戦も辞さない覚悟でシリア政府にPKK追放を迫った結果、シリア政府はPKKの拠点を閉鎖しPKK指導者オジャランを国外追放処分とした。そして両国は覚書を

1 Serhun Al, "Human Security Versus National Security: Kurds, Turkey and Syrian Rojava," in Emel Elif Tugdar and Serhun Al, eds., *Comparative Kurdish Politics in the Middle East: Actors, Ideas, and Interests*, (London: Palgrave Macmillan, 2018), p. 73.

2 たとえば, Carne Ross, "Power to the People: A Syrian Experiment in Democracy," *Financial Times*, October 24, 2015.

交わり、両政府がテロ活動の取り締まりで協力すること、シリアはPKKをテロ組織として認定し国内での活動を認めないこと、シリアの協力が不十分な場合、トルコはシリア国境から5キロ以内の範囲に限りシリア領内でPKKに対する取り締まりを実施できることなどが合意された（アダナ合意）。

こうしてPKKはシリアから撤退したが、2003年にはシリアに残ったPKKのメンバーらがPYDを発足させ、2011年にはその軍事部門としてのYPGが正式に作られた。YPGにはシリアのクルド人だけでなく、トルコのクルド人も義勇兵として加わったし、軍事教練やイデオロギー教化にはPKKの幹部らが関わっていた<sup>3</sup>。指揮系統においてもYPGとPKKは繋がっていた<sup>4</sup>。トルコ政府の公式な見解は、「PKK指導者オジャランが獄中から出した指令によりPYDは設立された」というものである<sup>5</sup>。

1999年にケニアでトルコ当局に逮捕されて以来禁固刑に服しているオジャランは2000年代になると、党のイデオロギーであったマルクス・レーニン主義を放棄しトルコからの分離独立要求を撤回、新たに既存の国家内での「民主的連邦」樹立を唱えるようになった。そしてアサド政権が弱体化した結果シリア北部で勢力を伸ばしたPYDは、まさにシリア北部でこの「民主的連邦」構想を実行に移す機会を獲得したのだった。シリア北部のクルド自治区は「ロジャヴァ」と呼ばれているが、これはトルコ、イラン、イラク、シリアにまたがる「クルディスタン」の「西」という意味である。したがって、トルコ政府からすればシリアのクルド自治区はトルコも含む「クルディスタン」と有機的につながっているものであり、同地における自治拡大を認めることはできなかった。

トルコ国内ではエルドアン政権は2013年からPKKと正式に和平交渉を始めていた。しかしPKKは2015年7月に停戦破棄を宣言し、PKKによるトルコ当局を狙ったテロが再び始まった。トルコ南東の都市部ではPKKの青年民兵組織として2006年に設立されたYDG-H（愛国的革命青年運動）が、市街地にバリケードや検問所を設置し住民の監視を開始した<sup>6</sup>。さらに塹壕を掘って治安当局の車両の進入を食い止め、トルコ政府の主権が及ばない事実上の「自治区」の樹立を宣言する事態となった。このように都市部でクルド人居住区域をトルコの支配から「解放」させる戦略を、YDG-Hは「革命的人民戦争」と呼んだ。これに対しトルコ当局は、イラク北部やトルコ南東部の山岳地帯にあるPKKの拠

---

3 Güneş Murat Tezcür and Helin Yıldız, “Kurdish Politics in post-2011 Syria: From Fragmentation to Hegemony,” *Mediterranean Politics*, published online September 25, 2019, p. 4.

4 勝又郁子「トルコとクルド問題」『中東協力センター』2016年5月号、23-24頁。

5 Türkiye İçişler Bakanlığı, *PKK/KCK Terör Örgütünün Suriye Kolu: PYD-YPG*, 2017. [https://www.icisleri.gov.tr/kurumlar/icisleri.gov.tr/IcSite/strateji/deneme/YAYINLAR/%C4%B0%C3%87ER%C4%B0K/pyd\\_arapca.pdf](https://www.icisleri.gov.tr/kurumlar/icisleri.gov.tr/IcSite/strateji/deneme/YAYINLAR/%C4%B0%C3%87ER%C4%B0K/pyd_arapca.pdf)

6 Humeyra Pamuk, “A New Generation of Kurdish Militants Takes fight to Turkey’s Cities,” *Reuters*, September 28, 2015. <https://www.reuters.com/article/us-turkey-kurds-youth/a-new-generation-of-kurdish-militants-takes-fight-to-turkeys-cities-idUSKCNORRODS20150927>



点を標的とする空爆および地上部隊によるせん滅作戦を開始した。同時に都市部では外出禁止令を発令し、政府は警察や憲兵隊だけでなくトルコ軍も投入してYDG-Hを追い詰めた。2015年7月から2016年7月の間に、PKK/YDG-Hによるテロ及びトルコ当局との衝突で、一般市民300人、治安当局者582人、PKKメンバー653人、所属不明の若者219人が死亡した<sup>7</sup>。

## 「ユーフラテスの盾」と「オリーブの枝」作戦

国内外でPKKに対する脅威認識を強めたトルコ政府は2016年8月、シリア北部への越境攻撃を開始した。この「ユーフラテスの盾」作戦は、ISの脅威を排除し、シリア北部から北西部へ伸長するPYDをけん制しつつ、さらにはトルコと連携するシリアの反体制派組織を支援することを目標としていた。しかしシリア北部のマンビジュでPYDがISの排除に成功し同市を掌握すると、トルコがマンビジュに進軍してPYDと衝突する可能性が高まった。その結果、PYDをそれぞれの思惑から個別に支援する米国とロシアはトルコに圧力をかけ、トルコは2017年3月29日、作戦終了を発表した。

しかしトルコは2018年1月、今度はシリア北西部アフリンからのPYDの排除を目的に2回目の越境軍事作戦「オリーブの枝」を開始した。長年シリアを拠点としていたPKKにとって、アフリンは特に重要な町であった。シリア北部の他のクルド人居住区では様々なクルド系政治組織が混在していたのに対し、アフリンではPKKが地元住民との間に強固なネットワークを構築し、大きな影響力を獲得していたためである。実際にPKKに参加したシリアのクルド人の中で、アフリン出身者が突出して多かった<sup>8</sup>。作戦開始から2ヵ月後、トルコはアフリンを制圧し、クルド人勢力を撤退させた<sup>9</sup>。

トルコはすでに300万人ともいわれるシリア難民を受け入れていたが、トルコ政府によれば作戦終了後、「ユーフラテスの盾」作戦領域には26万人のシリア難民が<sup>10</sup>、「オリーブの枝」作戦の作戦領域には15万人が帰還または再定住した<sup>11</sup>。トルコ政府はさらにPYDを

---

7 International Crisis Group, *Turkey's PKK Conflict: The Death Toll*, July 20, 2016. <https://www.crisisgroup.org/europe-central-asia/western-europemediterranean/turkey/turkey-s-pkk-conflict-death-toll>

8 Göneş Murat Tezcür and Helin Yıldız, “Kurdish Politics in post-2011 Syria: From Fragmentation to Hegemony,” *Mediterranean Politics*, published online September 25, 2019, p. 4.

9 “Syria War: Turkish-led Forces Oust Kurdish Fighters from Heart of Afrin,” *BBC*, March 18, 2018. <https://www.bbc.com/news/world-middle-east-43447624>

10 “260,000 Syrians Returned to ‘Euphrates Shield’ Operation Area: Turkish Defense Minister,” *Hürriyet Daily News*, November 1, 2018. <http://www.hurriyetdailynews.com/260-000-syrians-returned-to-euphrates-shield-operation-area-turkish-defense-minister-138496>

11 Zeynep Bilgehan, “Some 150,000 Syrian Have Returned from Turkey,” *Hürriyet Daily News*, May 1, 2018. <http://www.hurriyetdailynews.com/some-150-000-syrians-have-returned-from-turkey-131108>

排除した領域で学校や病院などの住民サービスを開始するだけではなく、トルコ郵政公社の支局を開設しトルコリラを流通させることで、トルコによる支配の既成事実化を進めた。

## トルコの苛立ち

こうしてトルコはシリア北央部と北西部の国境一帯を事実上の勢力圏として確保することに成功した。しかしユーフラテス川東側の一帯は、ISに代わりPYDが支配していた。その領域はシリアのおよそ30%に相当する

広さとなっていた。2019年10月9日に始まった「平和の泉」作戦は、トランプ米大統領がシリアからの米軍撤退を一方向的に決定したことを受けてトルコが突如実施したと報じられている。しかし実際には、トルコ政府は「オリーブの枝」作戦終了直後からユーフラテス川以東での軍事作戦の検討を開始し、さらにはトランプ大統領がISを撃破したとして2018年12月にシリアの米軍を2019年にも撤退させると発表したこともあり、米軍撤退を念頭に綿密な作戦準備を進めてきていた<sup>12</sup>。

PYDがシリア北部で勢力を伸ばすことを懸念するトルコ政府は、米国にPYDへの支援を中止するよう何度も申し入れてきた。しかし米政府はYPGへの軍事援助を続けたのだった。2019年8月にはようやくトルコが求めてきたシリア北部における安全地帯を設置することに米政府が合意し、それに向けた「共同作戦センター」を立ち上げることが決まった<sup>13</sup>。しかし両政府間での詰めの作業などはその後なかなか進展せず、トルコ側は不満を募らせていた。特に両政府は、安全地帯の範囲および安全地帯を管理する上での指揮系統をめぐる対立を続けていた。また、YPGを支援する米軍の存在は、トルコから見れば「テロ組織を米軍がトルコから守っている」ようにも見えていた。米軍がYPGに提供した武器がトルコに対する攻撃で使用されていることにもトルコは懸念を強めた。こうした中、エルドアン大統領は8月31日、安全地帯の管理権はトルコに与えられるべきだと強調し、米政府がこれを受け入れなければ「数週間以内にトルコ単独で行動に移る」と警告していた<sup>14</sup>。

---

### 筆者紹介

所属：テンプレート大学ジャパンキャンパス政治学科  
上級准教授

略歴：1999年神田外語大学外国語学部を卒業後、2002年にトルコの中東工科大学政治行政学部にて修士号取得。2015年にユタ大学政治学博士取得。2013年よりテンプレート大学ジャパンキャンパスで教える。また、2009年より（一財）日本エネルギー経済研究所中東研究センター外部研究員。近著に「エルドアン大統領の歴史認識—ケマリズム史観への挑戦」『中東研究』（2017年、第530号）、「トルコにおける抵抗文化—ハンスト・キャンペーンからみる国家・社会関係」（小笠原弘幸編『トルコ共和国 国民の創成とその変容—アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会、2019年）など。

---

---

12 2018年12月のトランプ大統領によるシリア撤退発表後のトルコの対応については、池内恵「トランプ大統領のシリア撤退に適応するトルコ」『中東協力センター』2019年1月号、12-18頁。

13 Sarah Dadouch, “Turkey, U.S. Agree to Form Joint Operation Center for Syria Safe Zone,” *Reuters*, August 7, 2019. <https://www.reuters.com/article/us-syria-security-turkey/turkey-u-s-agree-to-form-joint-operation-center-for-syria-safe-zone-idUSKCN1UX0Y9>

14 “Harekât Planımızı Devreye Sokaçağız,” *Milliyet*, Eylül 1, 2019. <http://www.milliyet.com.tr/siyaset/harekat-planimizi-devreye-sokariz-6025823>

大統領はさらに9月に入ると、安全地帯の設置期限は「9月末」と明言し、米政府に迫った<sup>15</sup>。

トルコ政府は9月下旬にニューヨークで開催される国連総会で、トルコ主導の安全地帯構想への支持取り付けを目指した。9月24日、国連総会に出席したエルドアン大統領は、トルコ国境沿いに全長480キロメートル、幅30キロの安全地帯を設置すると述べた。トルコが要求する安全地帯の範囲は、8月に米国と合意したものよりも大幅に拡張されていた。そしてトルコで生活する360万人以上のシリア難民のうち最大200万人を安全地帯に再定住させると訴え、各国に理解を求めた。しかし国際社会での支持は広がらず、トランプ米大統領との会談も実現しなかった。

事態が動いたのは10月7日だった。前日にエルドアン大統領はトランプ大統領とシリアについて電話で会談し、米政府がトルコとの約束を果たしていないことについての懸念を伝えた<sup>16</sup>。同日夜、米ホワイトハウスは「トルコが近くシリア北部で作戦を開始する。米軍はこの作戦に関与しない」との声明を発表した。そして7日、トランプ大統領はシリアからの米軍撤退を発表し、PYDを支援するためにシリア北部国境地域に駐屯していた米軍部隊は撤退を開始したのである。同日、米国防総省は米主導の対IS有志連合軍の航空任務命令（Air Tasking Order:ATO）からトルコを除外し、ISR（諜報・監視・偵察）をトルコとは共有しないと発表することで、トルコのシリア攻撃に一切関与しない姿勢を示した<sup>17</sup>。

## 「平和の泉」作戦

こうしてトルコは10月9日、シリア北部で「平和の泉」作戦を開始した。トルコはシリア北央で空爆や砲撃を行ない、トルコ軍地上部隊と、トルコが支援するシリア反体制派民兵組織で構成されるシリア国民軍がシリア領内に入った。軍事作戦についてトルコ外務省は、「国連憲章51条に基づく自衛権の行使」であり、テロとの戦いに関する国連安保理決議に基づく正当な武力行使だとの声明を発表した<sup>18</sup>。そして攻撃目標はクルド住民ではなくYPGというテロ組織の排除であり、トルコはシリアの領土的一体性を尊重するとした。

---

15 “Cumhurbaşkanı Erdoğan: Eylül Bitmeden Güvenli Bölge Kurulmazsa Kendi Yolumuza Gideriz,” *Milliyet*, Eylül 8, 2019. <http://www.milliyet.com.tr/galeri/cumhurbaskani-erdogan-eylul-bitmeden-guvenli-bolge-kurulmazsa-kendi-yolumuza-gideriz-6030056>

16 なお、米政府のジェームズ・ジェフリー・シリア担当特別代表は10月23日、米下院外交委員会のシリア情勢に関する公聴会で、「エルドアン大統領は10月6日のトランプ大統領との電話会談前に作戦決行の方針をすでに固めていたと思う」と証言し、トランプ大統領との電話会談が越境攻撃の契機となったとする見方を否定した。Laura Rozen, “Trump Hails Syria ‘Breakthrough,’ Lifts Sanctions on Turkey,” *Al-Monitor*, October 23, 2019. <https://www.al-monitor.com/pulse/originals/2019/10/trump-hail-syria-breakthrough-lift-sanctions-turkey.html>

17 米政府はトルコが対IS有志連合への参加を決めた2015年8月、トルコ空軍と有志連合の作戦が干渉し合わないことを保証する措置として、トルコ軍機をATOに組み入れていた。Michael Hernandez, “US Pulls Turkey Out of Air Tasking Order in Syria,” *Anadolu Agency*, October 7, 2019. <https://www.aa.com.tr/en/americas/us-pulls-turkey-out-of-air-tasking-order-in-syria/1605170>

18 [http://www.mfa.gov.tr/no\\_297\\_-baris-pinari-harekati-ni-hedef-alan-yorumlar-hk.en.mfa](http://www.mfa.gov.tr/no_297_-baris-pinari-harekati-ni-hedef-alan-yorumlar-hk.en.mfa)



トルコの越境作戦は早いペースで展開した。12日にはトルコ軍は作戦目標であったシリア北部のラスアルアインを、翌13日にはテルアビヤドを掌握した。さらにトルコ軍は、クルド勢力が物資輸送などに使用していたマンビジュとカーミシリーを結ぶM4高速道路をおよそ30キロにわたって制圧した。

トルコがシリアへ軍事侵攻しながら「シリアの領土的一体性」の維持を強調するのは矛盾に満ちた弁護に聞こえるかもしれない。しかしここにはトルコの二つの意図が込められている。ひとつは、トルコの軍事作戦はシリアへの侵略ではなくあくまでもトルコへの脅威を除去するための自衛行為であることを知らしめ、シリア北部においてクルド人勢力が事実上の独立国家を樹立し、最終的にはシリア領土が分割されることを防ぐことである。

しかしトルコのシリア侵攻は、国際社会からの強い非難を浴びた。「平和の泉」作戦への支持を表明した国は、トルコと兄弟国のアゼルバイジャン、伝統的な同盟国であるパキスタン、近年関係を強化しているカタールくらいであった。一方EU諸国はトルコの軍事作戦に反対し、トルコへの武器輸出を制限することを発表した。米政府は14日、トルコの国防省とエネルギー天然資源省、さらにはアカル国防相ら3閣僚を制裁対象に指定した。さらにトルコとの貿易交渉を即時停止し、トルコの鉄鋼製品に対する関税率を50%引き上げることも発表した。

トランプ大統領は10月17日、ペンス副大統領をトルコに派遣した。エルドアン大統領とペンス副大統領との会談の結果、トルコ軍が越境攻撃を120時間停止し、その間にYPGがトルコとの国境一帯から30キロ圏外に戦闘員を撤退させることが合意された。YPGも合意に従うとの声明を発表した。アンカラのペンス副大統領から報告を受けたトランプ大統領は、「トルコから素晴らしい知らせだ。エルドアン大統領に感謝する。これで何百万もの命が救われるだろう」とツイートした<sup>19</sup>。

一方ロシアのプーチン大統領は10月15日、米軍撤退がもたらしたシリア北部の「力の空白」をいち早く埋めるべくエルドアン大統領にロシア南部ソチでの首脳会談を呼びかけた。トルコ政府はこれに応じ、エルドアン大統領は東京で行なわれる「即位礼正殿の儀」への参列を急ぎょ取りやめて22日、ソチでプーチン大統領と会談した。会談では、10月23日正午（現地時間）にロシア軍警察とアサド政権の国境警備隊がシリア北部の国境地帯に入り、150時間以内にYPG戦闘員を国境から30キロ圏外に撤退させ、その後トルコとロシアが国境から10キロの圏内を合同でパトロールすることが合意された<sup>20</sup>。また、トルコに

---

19 Michael Hernandez, "Trump Says 'Great News' Coming from Turkey After Talks," *Anadolu Agency*, October 17, 2019. <https://www.aa.com.tr/en/americas/trump-says-great-news-coming-from-turkey-after-talks/1617560>

20 Memorandum of Understanding Between Turkey and the Russian Federation, October 22, 2019. <http://en.kremlin.ru/supplement/5452>

図2 トルコとロシアが合意した安全地帯



(出所) AFP

とってもう一つ重要な合意内容は、「平和の泉」作戦でトルコ軍が掌握したテルアビヤドからラスアルアインまでの東西120キロ、国境から32キロの範囲におよぶ領域を「現状 (status quo)」として追認した点である (図2における紫で示された一帯)。ソチ会談後、アサド大統領も合意内容を受け入れたことで、この領域におけるトルコ軍の駐留がロシアおよびシリアに承認されたことになる。

会談翌日、トルコ国防省は、クルド勢力の撤退が確認できたとして、新たな軍事作戦の必要性はなくなったと表明した。これでトルコの「平和の泉」作戦は事実上完了した。トランプ大統領は、トルコに対する経済制裁を解除することを明らかにした。10月28日にはロシアの軍関係者がアンカラ入りし、トルコ側とソチで合意したパトロールなどについて協議し、11月1日、両国はシリア北部で合同パトロールを開始した。

### 安全地帯は実現したが…

「平和の泉」作戦により、トルコ国境一帯からYPGは撤退した。ロシアが認めた安全地帯はトルコが本来求めていた範囲よりも狭いとはいえ、そしてその管理はロシアとの共同ということになったとはいえ、トルコの重要目標が一応は達成されたと考えてよいだろう。米軍の抜けた穴を、トルコはロシアとともに管理することになった。

しかしながら、PYD/YPGはあくまでもトルコとの国境付近から撤退しただけであり、トルコにとっては今なお潜在的脅威であることに変わりはない。「平和の泉」作戦中にトルコ軍が無力化した YPG 戦闘員は670人前後である<sup>21</sup>。YPG は6万5000人から7万人ほど

21 Nilay Kar Onum, "Turkey 'Neutralizes' 673 YPG/PKK Terrorists in N Syria," *Anadolu Agency*, October 17, 2019. <https://www.aa.com.tr/en/operation-peace-spring/turkey-neutralizes-673-ypg-pkk-terrorists-in-n-syria/1616568>



の戦闘員を抱えていると言われているが、これが事実であれば、トルコ軍との戦闘でYPGは1%の戦力を失ったに過ぎない。また、トルコとロシアが交わしたソチ合意では、YPGの戦闘員の撤退と重火器の撤去が合意されたものの、PYDの治安機関であるアサーイシュは撤退対象ではなく、現在もシリア国境付近に残存している。さらにトランプ大統領は、米軍の一部をシリア東部デリゾールの油田地帯に派遣し、石油取引の収入をクルド人勢力が得られるよう支援すべきとの見方を示し、トルコは米軍が本当にPYD支援を辞める用意があるのか疑念を募らせている。

トルコが越境攻撃のもう一つの理由としたシリア難民の帰還がスムーズに進むかは全く不透明である。PYDの撤退により、紛争を逃れてトルコに避難したシリア住民の中には、当然自発的に帰郷を望む人びとはいるだろう。しかし問題は、PYDに代わりシリア政府軍がシリア北部に戻ってきてしまったことである。シリア難民の中にはシリア内戦当初から反政府運動に加わった市民が多数含まれており、こうした人びとは帰郷に二の足を踏むだろう<sup>22</sup>。また、トルコはシリア北部の安全地帯に100万人以上の難民を再定住させるとしているが、住宅建設や生活基盤整備などに必要な数百億ドルともいわれる費用をトルコだけで負担することは不可能である。しかしトルコによる再定住計画が一部では「民族浄化」と批判される中、欧米諸国が支援に乗り出す可能性は低い<sup>23</sup>。エルドアン大統領はEUに対し支援を求めつつ、支援がない場合にはトルコの国境を開放すると脅しをかける。

このように、トルコの安全保障上の脅威は消滅したとは言えず、難民帰還計画の実現も容易ではない。しかしそれでも当面トルコによる武力行使の可能性は大きく低下した。今後トルコはシリア内戦の終結に向けて外交ルートを通じて関与していこう。トルコは現在でもアサド大統領の退陣という従来の立場を公式には取り下げていない。しかしソチでのプーチン大統領との会談でエルドアン大統領は、アダナ合意に基づきシリア政権と実務的協力を受けることを受け入れた。また、9月16日に行われたトルコ・ロシア・イラン3ヵ国首脳会談では、シリア内戦の政治的終結に向けてシリアの新憲法を起草する憲法委員会の設置が合意されている。委員会にはアサド政権（ロシアとイランが支援）、反体制派勢力（トルコが支援）、市民社会組織の代表らが参加することが決まり、国連もシリアの憲法

---

22 Carlotta Gal, “Moving Refugees to ‘Safe Zone’ is a Tough Sell,” *The New York Times*, November 1, 2019. <https://www.nytimes.com/2019/11/01/world/middleeast/syria-refugees-turkey-safe-zone.html>

23 一方でトルコ側はシリア北部でPYDがアラブ人やトルクメン人などを強制退去させたと非難していた。Mahmoud Barakat, Selen Temizer, Mucahit Aydemir, “YPG/PKK’s Human Rights Violations in Syria’s Tal Abyad,” *Anadolu Agency*, October 16, 2019. <https://www.aa.com.tr/en/middle-east/ypg-pkk-s-human-rights-violations-in-syrias-tal-abyad/1616038> この点についてはアムネスティ・インターナショナルもPYDが強制移住や家屋の破壊などを行なったとする報告書をまとめている。Amnesty International, *We Had Nowhere Else to Go: Forced Displacement and Demolitions in Northern Syria*, 2015. <https://www.amnesty.org/download/Documents/MDE2425032015ENGLISH.PDF>

制定過程に関与する。こうした流れは、トルコ政府が事実上アサド政権を再承認したことを意味している。トルコは今後もシリア紛争の当事者として、ロシアやイラン、そしてシリアと利害調整を繰り返しながら関与を続けていくだろう。

### 参考資料 「平和の泉」作戦の経緯

- 10/6：米トルコ電話首脳会談。同日夜、トランプ米大統領、米軍のシリア撤退を発表。
- 10/7：米軍部隊、シリア北東部から撤収開始。
- 10/9：トルコが「平和の泉」作戦開始。
- 10/12：トルコ軍がラスアルアインを掌握。
- 10/13：トルコ軍がテルアビヤドを掌握。
- 10/14：米政府、対トルコ経済制裁を発表。
- 10/14：シリア政府軍が戦略的要衝のマンビジュに進軍。
- 10/15：プーチン大統領がエルドアンと電話会談、首脳会談呼びかけ。
- 10/17：ペンス米副大統領がエルドアン大統領と会談。120時間（5日間）の「作戦停止」で合意。
- 10/22：エルドアン大統領とプーチン大統領がソチで会談。YPGの撤退で合意。
- 10/23：トルコ国防省、YPGの撤退を受けて「新たな作戦は必要なくなった」と発表。米政府はトルコに対する経済制裁解除を決定。
- 11/1：トルコとロシア、シリア北東部で合同パトロール開始。

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。